

## シリーズ『会長だより:郷土の誇り』(1)相良の「般若寺」

杉本豊久

本部同窓会長の蓑川和道先輩（1966年卒・第39回生：金谷出身）に案内していただいたのが最初の訪問だった。150号線で相良に向かい、萩間川に架かる相良橋を越えてすぐに右折し、69号線をしばらく行くと相良の商店街に入る。右折してさらに走り、今度は左折して山に入ったところに般若寺があった。お寺の正面駐車場に車を止めると、立派な山門が我々を迎えてくれた。山門をくぐり、鐘楼を左



手に見ながら石畳を進むと、正面に本堂がある。曹洞宗圓覺山般若寺、1465年ごろ、珠岩玄珍大和尚により開山したお寺で、1707年（宝永4年）に当初の伽藍が全焼し、1865年（文久4年）に現在の本堂が改築されたという。このお寺のご本尊は、聖観世音菩薩（江戸中期）だが、このお寺最古の秘仏として、阿弥陀如来様（室町期）が、両側に脇持仏として不動明王と毘沙門天に守られ、鎮座している。

このお寺のご住職、西村元隆さん（46歳）の弟さんが藤枝東高校のサッカー部であり、このお寺とご縁のある飯塚盛久さん（同サッカー部 OB：焼津在住で設計・土建業）のお宅に下宿されていたとのこと。その住職親子さんがお寺の宝物を見せてくれるということで、私の同級生の布施隆司君（サッカー部 OB：現在、藤枝市大手の長生布施治療院で整体師をしている）、蓑川先輩（前述）、河辺先輩と4人で、再びこのお寺を訪れることとなった。ご住職と、お父上（先代住職）、西村元英様にお寺の中を案内していただいた。ご住職のお子さんが卓球好きで、本堂に卓球台を置き、楽しんでいるとのこと。私がTリーグや海外の国際大会で審判員をしていることを知って興味を示したので、石川佳純選手とのツーショットの写真を見せてあげると、たいそう喜んでた。

このお寺のお宝は三つある。その一つは、「大般若波羅蜜多經六五卷」だ。大般若經は600巻あるが、その内65巻がこのお寺にある。すべて藤原写経で、最古のものは、1066年（治

歴2年)の奥書があり、県下最古の写経で、貴重な史料といえる(昭和45年6月2日、静



岡県指定文化財)。二つ目は、相良城の杉戸6本(相良城の大書院の襖戸(ふすまど)で、狩野典信筆と伝えられている)と、徳川家康公別荘、相良御殿の杉戸2本(昭和47年7月12日、牧之原市指定文化財)である。いずれも、素晴らしい絵で、保存状態も良い。

三つ目のお宝は、「破れ陣太鼓」としてその呼び名も高い、田沼意次公に縁のある「陣太鼓」(重量28.1kg、胴回り215cm、張皮は牛の皮。直径55cm、胴には田沼家の七曜ご紋が描かれている)だ。この陣太鼓のいわれは面白い。

「田沼意次公全盛の頃、相良へ海賊が押し寄せて来た。田沼の家来たちが、これを迎え撃たんとしたとき、ある知恵者が、『まあ待て、私に良い考えがある』と皆を押し止めた。そしてその男は、陣太鼓を背負い海岸近くの小山(後に陣太山と呼ばれた)に登り、「ドーン、ドーン」と陣太鼓を打ち鳴らした。今まさに上陸しようとしていた海賊たちは大砲を打たれたと思い大慌てで退散、そして沖合の暗礁(愛宕岩)に乗り上げ沈没、全滅してしまったという。その音は重厚でしかも素晴らしい音色で響きわたり、西は浜松、東は駿府にまで聞こえたといわれる。その音の秘密は、太鼓の中に金塊が詰まっていたからだと言えられてきた。ところが、大正2年6月の雨の夜、その金塊を盗もうと泥棒が入り、太鼓を鋭利な刃物で切り裂いてしまったのだ。今となっては、中に金が入っていたのか、また元の音もどうだったのかもわからない。なお、普通陣太鼓は二人で持つのだが、その時は知恵者が一人で背負って子山に登ったので、それ以来「背負ったか相良の陣太鼓(しょったかさがらのじんたいこ)」と言われてきた。」

この他にも、1762年(宝暦12年)に描かれたという「涅槃図」(お釈迦様がお亡くなりになった時の様子が描かれている)もあり、2月の「涅槃会(ねはんえ)」には御開帳になるという。最後に、ご住職が「これは公開してはいないのですが、」と言われ、大きな桐の箱を取り出した。田沼意次公が実際に身につけられた「袴(かみしも)」の実物だという。想像したよりも小ぶりの袴に少し驚いたが、ずしりとした本物の重みを感じ、見入った。

